

岩波の月刊誌『世界』に毎月連載の「リレーコラム 沖繩（シマ）という窓」が、沖繩県民の切実な声を届けている。10月号は、「琉球新報」の松元剛氏が「昭和天皇『拝謁記』『一部の犠牲』続く沖繩」と出して寄稿している。松元氏は「沖繩を切り捨てた昭和天皇の判断は三度に及ぶ」と書き始めている。① 太平洋戦争の戦局が悪化した1945年2月、近衛文麿元首相から早期和平を進言された昭和天皇は、「今一度戦果を挙げなければ、肅軍の実現は困難だ」と退けた。近衛の進言を受け入れていれば、3月の東京大空襲、3月末からの沖繩戦、8月の広島、長崎の原爆投下による多大な犠牲は避けられたはずである。② 1945年7月、和平交渉に向け、ソ連への特使に、天皇が近衛に託した「和平交渉の要綱」には「最低限沖繩、小笠原島、樺太を捨て、千島は南半分を保有する程度とする」と記され、これらの島々を差し出すことが、終戦の材料であった。沖繩は「捨て石」だったのである。③ 1947年の「天皇のメッセージ」は「25年から50年、あるいはそれ以上」沖繩を米国に貸し出す考えを伝え、「（昭和天皇は）アメリカが沖繩を始め琉球の他の諸島を軍事占領し続けることを希望している」と、米側公文書は記録している。昭和天皇は、戦中から沖繩を切り捨て、戦後も、沖繩に米軍占領の犠牲を強いていたのである。

初代宮内庁長官を務めた故田島道治氏が、昭和天皇とのやり取りを記録した「拝謁記」（18冊にも上る文書）を残していたことが分かった。NHK始め大手メディアは「拝謁記」の内容を公表したが、公表されたものは一部であろう。メディアは、独立解放を祝う1952年5月の式典で、天皇は戦争への「後悔と反省」を表明しようとしたが、吉田茂元首相の反対で削除されたという内容に力点を置いて、紹介していた。琉球新報は「拝謁記」を入手し、一面で「一部の犠牲はやむを得ぬ」と横大見出しで報道した。沖繩県民の視点は違うのである。1953年11月の拝謁で、昭和天皇は下記のように語っていた。「基地の問題でもそれぞれの立場により論ずれば一應尤もと思ふ理由もあらうが 全体の為ニいゝと分れば 一部の犠牲は已むを得ぬと考える事、その代りハ、一部の犠牲となる人ニハ 全体から保障するという事ニしなければ 国として存立して行く以上、やりようない話。」その頃、沖繩では、米国民政府が「土地収用令」を公布し、「銃剣とブルドーザー」で民有地の強制接収が行われていた。本土では、米軍基地反対闘争が激しさを増し、本土に駐留していた海兵隊の大半が沖繩に押し出された。昭和天皇のメッセージは、米軍基地が沖繩に過剰に集中する源流になったと認めざるを得ない。

① に関わる問題で、1952年に「拝謁記」で「私ハ実は無条件降伏は矢張りいやで、どこかいゝ機会を見て早く平和に持って行きたいと念願し、そこには一寸こちらが勝ったような時ニ其時を見付けたいという念もあつた」と書いている。沖繩戦研究の重鎮である沖繩国際大学教授の石原昌家氏は、「米英軍に『出血』を強いて（戦果を挙げ）、天皇存続の保証を引き出し、講和を結びたいという意味である。『戦果を挙げる』こと（天皇制の存続）への執着が、未曾有の戦禍を拡大したことを『天皇自身のことば』で明白にしたと分析している。松元氏は、「拝謁記」に記された天皇の「後悔と反省」は国民や他国への謝罪ではなく、日本人全体が軍の暴走を許したことを「反省」しなければならぬという趣旨ではないかと言ひ、昭和天皇が地位にとどまったことで、戦争責任がぼやけ、狭量と独善を宿した国家主義が強まる負の遺産になった側面は否定できないと論じている。犠牲を強いられ続けた沖繩からの声は、謙虚に聞き入るべき真実な声として響いてくる。